

研究ノート

画家・彫刻家・建築家

— 17世紀ルーヴル宮拡張計画における建築設計権とベルニーニ —

遠藤 太郎

目次

- I. はじめに
- II. 17世紀ルーヴル宮拡張計画の歴史的意義
- III. ベルニーニが考える建築家の職能
- IV. 近世イタリア及びヨーロッパにおける建築家の職能の発展とベルニーニ
- V. おわりに

I. はじめに

本研究は、ベルニーニとルーヴル宮拡張計画の関わりを通して、17世紀における建築家の職能の変化を明らかにしようとするものである。以下、既往研究におけるルーヴル宮拡張計画への評価を確認した後、職能問題に対するベルニーニの発言を検証し、近世の建築家の職能の変化・発展における彼の位置づけを明らかにしたい。

II. 17世紀ルーヴル宮拡張計画の歴史的意義

17世紀のルーヴル宮拡張計画というトピックは、美術史・建築史の研究対象としてしばしば取り上げられてきた。17世紀の後半に当時を代表する芸術家であったベルニーニが同じく当時のヨーロッパを代表する君主で

あったルイ14世の王宮の設計を依頼され、パリに出向いて仕事を行い、結局は実施されなかったというエピソードであるが、いずれの当事者も高い地位にあったということ、また、ベルニーニに付き添った通訳の日記により建築設計や彫刻制作について比較的多くの情報が残っていたということ、これらにより研究者達の関心をひいてきたと考えられる。

西洋建築史における“ベルニーニとルーヴル宮殿”というトピックへの視点としては、以下のようなものが代表的である。

1) ベルニーニによる建てられなかった代表作としての評価

これは、フランスとの関係を抜きにして、ベルニーニによる宮殿建築の設計例として評価するものである。ローマに建てられた建物より大きな計画であり、かつ円熟期の作品であるためベルニーニ及びイタリアの盛期バロックの宮殿建築の代表作の一つとも見なせる。例えばノルベルグ・シュルツは、ベルニーニが宮殿建築において目指した空間のシステム化と造形的統合への志向の最高潮がルーヴル宮の特に第1案に見られると評している。

2) フランスとイタリアの建築様式の違い

宮殿建築の構成として、フランスではアパルトマンを収容する大きな塔状のパヴィリオンを複数建て、その間を広間を収容する一部屋分の厚みの細長い翼部でつなぐという構成

がしばしば用いられていた。一方、イタリアでは建物全体に厚みを持たせてひとまとまりのブロック状のものとして設計するのが一般的であった。この点に関しては、建物に厚みを持たせると採光が悪くなるとの指摘がフランス側からベルニーニへとなされていた⁽³⁾。

屋根の形に関しても、フランスではかなり古く12世紀頃から屋根の勾配が大きくなっていったが、それに対してベルニーニはバラストレードによって屋根の隠れる設計を行った。ベルニーニの設計案を見たフランス人は、イタリアは美しいスレートを産出しないので屋根を隠してしまうのだらうと批判した⁽⁴⁾。

建設技術的には、ヴォールトにレンガを多用したり、壁体内部に整形されていない石材とモルタルを充填するタイプのイタリアの建設技術は、17世紀フランスのものとは対照的だった。17世紀中頃のフランスは、薄い目地によって切石を積み壁体とヴォールトを作ってゆくタイプの建設技術がヨーロッパの建築史の中でも最高度に発達した場であり、それがフランス建築の誇りとなっていた⁽⁵⁾。

さらに、フランスでは動線や部屋割りを機能的に細かく設計することが重視された。このようなプランニングの技術がdistributionと呼ばれてフランス建築の優秀な点であると考えられていた。一方、イタリアの宮殿というのは同じような大きさの部屋が単純に並んでいるだけのようにフランス人には見えていた⁽⁶⁾。

3) イタリアとフランスの文化的地位

17世紀のバロック様式は、近世においてイタリアが建築様式を主導した最後の時期と考えられている。西洋建築史図集に取り上げられた建物の件数を見ると、イタリアの建築が16世紀20件、17世紀13件、18世紀2件と急激に減っていくのに対し、フランスの建築は11件、11件、12件とコンスタントに取り上げられている⁽⁷⁾。大きく増えてはいないが、時代が下るにつれて広範囲の国々の建築が取り上

げられるようになる点を考慮すれば、フランスの地位の高まりを読み取ることはできる。

ベルニーニによる設計案が棄却され、最終的にフランス人によってルーヴル宮が設計されたことは、17世紀におけるイタリアの文化的地位の低下の始まりを象徴するとも見なせるであろう。

以上のように様々な観点から解釈されてきたトピックであるが、本研究では17世紀のルーヴル宮拡張計画を、建築を設計する権利を巡る争いの場としてとらえる。これは単に建築家同士が各自の能力をもって仕事を勝ち得ようとする争いではなく、そもそも建築家の職能とは何であり、どのような素養を身に付けた人間が建築家と呼ばれるべきか、という点に関わる争いである。

当時の建築家の出自は様々であった。ベルニーニのような彫刻家、ル・ブランのような画家、ルメルシエやマンサールのような石工、ル・ヴォーのような建築家兼ディヴェロッパー、ペローのような学者、等々。王室関係の建設現場に出入りしただけの請負業者が王の建築家を名乗ることの問題点が議論になることもあった。そうした中でベルニーニははっきり、芸術家(画家・彫刻家)こそが建築を設計すべきだと主張した。

III. ベルニーニが考える建築家の職能

以下に、ベルニーニのパリ滞在時の発言からこの問題に関する例を挙げた上で彼の職能観を明らかにする。

1) 実務上の役割分担に関する発言

- ・(ルーヴル宮建設のための土地収用に伴う建物の取り壊しに関して、)それは全く私(ベルニーニ)の問題ではない、それについて論じる気はない。私は創案に関する部分に専念すればよい。他のことは私の範囲外であり、もしその範囲外のことに力を入れたら、創案に関する部分を妨げるかもしれ

ない。ローマでは建築の実施に責任を持つ聖職者がいる。私がおんなのようなことに気を遣うべきではない。⁽⁸⁾

- ・私はピアノ・ノビレ（主階）に専念すれば十分であり、1階の住居の配置 distribution 等の問題は重要ではない、それについては（助手の）デ・ロッシが作業する。⁽⁹⁾
- ・（食事関係のオフィス、役人達の部屋、トイレ、馬小屋などのプランニング作業がベルニーニを交えてなされていた時期）私は現在は何もしていない。⁽¹⁰⁾

2) 設計の能力に関する発言

- ・ミケランジェロは偉大な彫刻家であり画家であったが、また神のごとき建築家であった、建築というものは完全にデッサンによって成り立っている。⁽¹¹⁾
- ・建築というのは人体から引き出されたプロポーションに基づく。これが、他の人よりも彫刻家や画家が建築で成功する理由である。彫刻家や画家は常に人体の姿を前に研究している。⁽¹²⁾
- ・画家や彫刻家は彼らの建築においてプロポーションの規則のために人間の体を持っている。⁽¹³⁾

以上、ベルニーニの発言を見てきた。

芸術家が建築を設計するという習慣はイタリアの、特にトスカナ地方では長い伝統を持っており、既に14世紀には画家のジョットーや彫刻家のピサーノが重要な建造物を設計していた。⁽¹⁴⁾ その背後には絵画・彫刻・建築を同じデッサン（素描）の芸術の3つの部門とみなす考えがあった。15世紀のアルベルティは彼の建築論の中で、様々な学問のうち建築家にとって確実に必要なのは絵画と数学である、と語っている。⁽¹⁵⁾ また16世紀にもヴァザーリが絵画・彫刻・建築を3つの芸術としてひとまとまりに扱った。⁽¹⁶⁾ 盛期ルネサンスを代表する建築家の一人と言えるアントニオ・ダ・サンガッロは、当時の主要建築家としてはめずらしく大工出身であったが、反対者は

サンガッロの設計能力に対する疑義を彼の出自と結びつけた。⁽¹⁷⁾

このような、絵画もしくは彫刻の修業を経れば建築を設計することも可能であるという考えが17世紀にまでも残り、それが上に挙げたベルニーニの発言にもはっきり現われている。ベルニーニと同時代の画家ピエトロ・ダ・コルトナも、建築の設計というのは自分にとっては暇つぶしのようなものだと語っていたと伝えられている。⁽¹⁸⁾ その背後には、絵画を描く能力が建築設計にも役立ち、また、フレスコで天井を埋めていく際に伴うような大変な肉体労働と高度な専門的技術を必要とする絵画の仕事と比べれば、建築は机に向かって設計図を描くだけでよく専門的な技術も大して必要ない、という考えが伺える。ベルニーニはパリへの到着早々、次のように述べていた。曰く、世の中の全てのものの美は、建築のそれも、プロポーションにある。そのプロポーションの起源はアダムの体にある。建築のオーダーの種類は男性と女性の体の差異から来ている。⁽¹⁹⁾

このいわば当時の芸術家の決まり文句のような発言は、その後の経緯を踏まえれば、今後どのような態度で設計に臨むのかを示したベルニーニによる所信表明であり、フランス側に対し、彼のような人物に設計を依頼したことに伴う覚悟を求める発言だった、と考えられる。

建築と人体のアナロジーというものは現代人から見ると一見荒唐無稽であり、それを主張することにどういう意味があるのか誰もが多少の疑問を抱かざるをえない。しかし、当時の芸術家（画家、彫刻家）達にとっては、自らの建築設計の権利を主張するための重要な根拠になった。つまり、建築の形態が人体の形態をお手本として設計されねばならないとするなら、人体の形態の専門家たる画家と彫刻家こそが建築設計の権利を持つはずである、という理屈である。

このような観点からすると、西洋建築史において数学的規則やプロポーションと深く関わるタイプの建築論が持っている社会的性格の一面が明らかになるかもしれない。それは、建設現場における専門的な徒弟修業の経験の欠如を埋めるものとしての建築論という側面である。現代においては比較的、芸術家としての性質を強く持った建築家であったル・コルビュジエも、比例や数式に強いこだわりを見せたこと、レンガの積み方から建築を考えるタイプであったライバルのミース・ファン・デル・ローエが理論に関して比較的寡黙だったことなどの例が思い出される。前者の設計の基礎が人体のプロポーションであったとするなら、後者のそれは材料の寸法であった。

以上、芸術家こそが建築を設計すべきというベルニーニの職能観を彼の発言から明らかにし、また、ベルニーニの考えと近世イタリアの伝統との関係を確認してきたが、このような、“芸術家による建築の支配”というコンセプトは、建物の設計にも反映されている。ベルニーニの設計の特徴の1つは統一性への志向にあるが、その統一性は物質的連続性よりも空間的連続性に基づいていた。フランス風の設計がパヴィリオンを囲む、あるいは翼部を挟む大きな壁体の連続性にその統一性の多くを負っており、いわば物質的統一を基礎としているのに対し、ベルニーニの設計は多数のアンフィラード軸による動線と視線の連続性にその統一性の多くを負っており、空間的統一を基礎としていた。⁽²⁰⁾つまり、職能問題における“芸術家による建築の支配”というコンセプトが、設計においては、“空間による物質の支配”の中に象徴的に表現されているのである。

IV. 近世イタリア及びヨーロッパにおける建築家の職能の発展とベルニーニ

ベルニーニの建築家の職能に対する考え方はイタリアの伝統につながるものであった。そして空間が物質を支配するというのもイタリアの近世建築に対してしばしば指摘されてきた傾向である。プラマンテのものときれるサン・ピエトロ大聖堂の計画案(羊皮紙のプラン、1506年頃)はその傾向の最初の大規模な現われと言える。

ともに芸術家として時代を代表する建設計画に取り組んだ二人の建築家であるが、その抽象的で美しく、しかし機能的には漠然とした設計案は、どちらも実際の使用者側から難色を示され、完全な実現を見ずに終わった。一方のプラマンテはユリウスという名前の教皇のためにコンスタンティヌスのバシリカとハドリアヌスのドームをお手本として設計をおこない、偉大な伝統の始まりを記した。もう一方のベルニーニのローマでの主人はアレキサンデル7世、つまり自称アレキサンダーであり、またパリでの主人であったルイ14世の彫刻を彫りながらベルニーニはそこにアレキサンダー大王の面影を見ていた。⁽²¹⁾ベルニーニは自らを、大王や皇帝に仕える芸術家と規定していたかもしれない。いわば彼は、イタリア近世芸術における人文主義の大王=皇帝的側面の最後の体現者であった。しかしルイ14世の建築長官コルベールはルーヴル宮の設計者に対し、造形のみでなく機能や設備、実施にまつわる様々な作業をもコントロールする新しい建築家像を求めた。そしてベルニーニはそれに応えることができなかったのである。

このエピソードの6年後(1671年)にはパリに建築アカデミーが設立され、建築家が専門的職能としての一步をさらに踏み出すことになる。ベルニーニのルーヴル宮計画とその

挫折は、芸術家による建築の支配というイタリア近世建築の偉大な伝統が終わりに近づいたことの、逆に建築の側から見れば、芸術からの解放が始まったことの告知であった。

V. おわりに

以上、ベルニーニとルーヴル宮の関わりを題材としながら、建築の設計や建築家というものの意味を考えてきた。建築家という職能の不安定性に関しては、既にローマ時代のウィトルウィウスが、靴作りや綿打ちなど比較的簡単な仕事でも素人は手を出さないのに、建築にだけは多くの素人が手を出そうとする、と指摘している⁽²²⁾。石を削るわけでもなく木を切るわけでもなく人に指示を与えるだけの建築家の給料の高さに対する疑問は中世にも挙げられていた⁽²³⁾。建築設計が十分に専門化されたと考えられる現代においても、設計料の意義が社会的に完全に認知されているわけではなく、また、現代の建築家はその職能の専門性に対して何の不安感も抱いていないとは言い切れないであろう。このように考えると建築家という職能はいつの時代にもある程度の揺らぎを抱えており、本研究で取り上げたトピックはその振れの比較的大きな一つを示すものと言える。

謝辞：本研究は平成 19～20 年度科学研究費補助金（若手研究 B，課題番号 19760450）により行われました。記して感謝の意を表します。

[注]

- (1) 本研究は建築史学会の 2008 年度大会記念シンポジウム「バロック建築研究の射程—バロック研究からみた「西洋建築史」の新たな可能性—」（2008 年 4 月 19 日，於・工学院大学）における発表「ベルニーニとルーヴル宮殿 ～17 世紀におけるルーヴル宮殿の建築家捜し～」のうち、職能問題に関連する部分を修正・発展させたものである。
- (2) Norberg-Schultz, Christian, *Baroque Architecture*, Electa/Rizzoli, 1979, pp.148-151.
- (3) ed. by Clément, Pierre, *Letteres, Instructions et Mémoires de Colbert*, tome V, Kraus Reprint, Nendeln, Lichtenstein, 1979 (firstly published in 1868), p.249, 263.ただし、当時のフランスは建物の厚みを大きくする試みがなされていた時期であり、最終的にはルーヴル宮も 2 部屋分の厚みの建物となった。
- (4) デュ・プレシ元帥による批判。Chantelou, Paul Fréart, *Journal du Voyage du Cavalier Bernin en France*, ed. by Ludovic Lalanne, Gazette des Beaux-Arts, Paris, 1885, p.240.このシャントルーはベルニーニに付き添ったフランス人通訳。
- (5) Pérouse de Montclos, Jean- Marie, *L'Architecture à la française: du milieu du XVe siècle à la fin du XVIIIe siècle*, Picard, Paris, 2001 (firstly published in 1982) が、近世フランスにおける切石技術の歴史を検証している。なお同書によれば、その後、高度な切石の技術を用いたヴォールトもレンガとモルタルで簡単に作られたヴォールトも性能的にはそれほど変わらないことが明らかになり、フランスでも切石の技術は廃れていった。
- (6) Pérouse de Montclos, op. cit., p.69.
- (7) 日本建築学会編、『西洋建築史図集』，3 訂版，彰国社，1981 年（第 1 版は 1953 年）。
- (8) 7 月 30 日。Chantelou, op. cit., p.76.
- (9) 10 月 6 日。Chantelou, op. cit., pp.205-206.
- (10) 10 月 15 日。Chantelou, op. cit., p.239.
- (11) 6 月 25 日。Chantelou, op. cit., p.38.
- (12) 7 月 1 日。Chantelou, op. cit., p.42.
- (13) 10 月 20 日。Chantelou, op. cit., p.257.
- (14) Wilkinson, Catherine, *The new Professionalism in the Renaissance*, in ed. by Kostof, Spiro, *The Architect: Chapters in the History of the Profession*, University of California Press, Berkeley & Los Angeles & London, 2000 (firstly published in 1977), pp.124-160 がこの問題を論じている。
- (15) アルベルティ，レオン・バッティスタ，『建築論』，相川浩訳，中央公論美術出版，東京，1982 年，298 頁。
- (16) ヴァザーリ，ジョルジョ，『ヴァザーリの芸術論：「芸術家列伝」における技法論と美学』，

翻訳・註解・研究＝辻茂＋高階秀爾＋佐々木英也＋若桑みどり＋生田圓，平凡社，1980年。

- (17) Ackerman, James S., *Distance Points: Essays in Theory and Renaissance Art and Architecture*, The MIT Press, Cambridge, Massachusetts and London, 1991, p.362.
- (18) Wittkower, Rudolf, *Art and Architecture in Italy 1600 to 1750*, Revised by Joseph Connors and Jennifer Montagu, Volume 2, The high Baroque 1625-1675, Yale University Press, New Haven and London, 1999 (firstly published in 1958), p.74.
- (19) 6月2日。Chantelou, op. cit., pp.13-14.
- (20) この問題は、拙稿「ベルニーニによるルーヴル宮計画案の平面と動線について」(2007年度日本建築学会大会 [於・福岡大学] にて発表、『日本建築学会大会学術講演梗概集』F-2分冊, 245～246頁, 2007年8月に収録)で取り上げた。
- (21) 8月15日。Chantelou, op. cit., p.99.
- (22) ウィトルーウィウス、『ウィトルーウィウス建築書』〈普及版〉, 森田慶一訳註, 東海大学出版会, 東京, 1979年, 148頁。
- (23) Kostof, Spiro, *The Architect in the Middle Ages, East and West*, in ed. by Kostof, op. cit., p.76.